

上田市文化財調査報告書第47集

史跡上田城跡

国指定史跡上田城跡平成3年度発掘調査概報

1992年3月

上田市教育委員会

上田市文化財調査報告書第47集

史跡上田城跡

国指定史跡上田城跡平成3年度発掘調査概報

1992年3月

上田市教育委員会

序

天正10年(1582)、戦国の乱世を疾風の如く生きた織田信長は、京都本能寺で明智光秀の謀反に倒れました。翌天正11年(1583)、信長没後の混乱に乗じて真田昌幸は小県制覇に乗りだし、そのための拠点として上田城の築城に着手しました。上田城築城に際して昌幸によって新しく形成された城下町は、現在の上田市街地にもほとんど姿を変えることなく受け継がれています。また、「上田」の地名も昌幸によって名付けられたもので、いわば上田城は上田市の原点ともいべき存在なのです。

真田氏の上田城は徳川の大軍を相手に2度の実戦を体験しながら守り抜いたという近世城郭としては他に例のない輝かしい戦歴を持った城でしたが、関ヶ原合戦後に破却され、現在の上田城は、寛永3～5年(1626～1628)に仙石忠政によって新たに復興されたものです。仙石氏による復興は忠政の病死により未完成に終りますが、上田城はその後の松平氏を経て明治維新まで受け継がれ、その雄姿を今に伝えています。

上田城跡の発掘調査は、平成2年度に策定された『史跡上田城跡整備基本計画書』では、すべての整備事業の前提となるものとして位置付けられており、平成2年度には本丸東虎口櫓門跡、二の丸北虎口石垣跡ほかについて実施され、櫓門礎石の跡や石垣根石が確認されました。そして今年度の発掘調査は、本丸西虎口と二の丸北虎口を中心に実施され、本丸西虎口では櫓門礎石、石垣根石等を検出し、二の丸北虎口では昨年に引き続き石垣根石のほぼ全容を確認したほか、未完成に終った櫓門の礎石を検出するなど、予想外の成果を収めることができました。

最後になりましたが、本調査に際し御指導いただきました文化庁文化財保護部記念物課、長野県教育委員会文化課の皆様方と、嚴冬期にも拘らず精力的に調査に参加していただいた作業員の皆様方に衷心より御礼を申し上げ、序といたします。

平成4年3月

内藤尚
上田市教育委員会教育長

例　　言

- 1 本書は、平成3年度に実施された長野県上田市大字二の丸に所在する国指定史跡上田城跡の発掘調査概報である。
- 2 平成3年度の上田城跡の発掘調査は、二の丸北虎口については国庫補助事業として上田市教育委員会が直営事業として実施した。また、本丸西虎口ほかの発掘調査については、市単事業として上田市教育委員会の組織した上田市遺跡発掘調査団に事業委託して実施した。
- 3 遺構実測図の作成は、有限会社写真測図研究所に委託して実施した。
- 4 本書に使用した写真は、塙崎が撮影したものを使用した。
- 5 本書の執筆、編集は塙崎が行った。
- 6 本調査に関わる資料はすべて上田市教育委員会の責任下に保管されている。その際に用いる遺跡の略号は、「UDJ」である。
- 7 本書が上梓されるまでには、多くの方々や諸機関より御指導、御協力を賜った。

以下、御芳名を記して深く感謝の意を表したい。（敬称略）

平井聖、大萱昭芳、高橋今朝男、上田招魂社、真田神社、東信土建株式会社
上田市公園管理事務所、上田市民会館、上田市立博物館、上田市立信濃國分
寺資料館

目 次

例 言

目 次

挿図目次

図版目次

I 調査の経緯	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の体制	2
3. 調査日誌	2
II 本丸西虎口の調査	3
1. 調査の目的	3
2. 調査の概要	3
3. 出土遺物	4
III 二の丸北虎口の調査	5
1. 調査の目的	5
2. 調査の概要	5
3. 出土遺物	8
IV 本丸堀底遺物の調査	8
1. 調査の目的	8
2. 調査の概要	9
3. 遺 物	9
写真図版	

挿 図 目 次

第1図 発掘調査位置図	11
第2図 本丸西虎口平面図	12
第3図 二の丸北虎口平面図	14
第4図 本丸西虎口石垣立面図	16

図 版 目 次

図版1	1.本丸西虎口櫓門跡 2.本丸西虎口石垣跡 3.本丸西虎口現存石垣
図版2	1.本丸西虎口石垣根石東面 2.本丸西虎口石垣根石南面 3.本丸西虎口石垣跡栗石列
図版3	1.本丸西虎口櫓門跡部分 2.本丸西虎口櫓門礎石 3.二の丸北虎口全景
図版4	1.二の丸北虎口石垣跡全景 2.二の丸北虎口石垣根石東面 3.二の丸北虎口石垣根石・土塁接続部
図版5	1.二の丸北虎口櫓門礎石 2.二の丸北虎口石垣根石東側土塁接続部 3.伝染病院遺構
図版6	1.二の丸北虎口測量風景 2.本丸堀底緑色凝灰岩群 3.本丸堀底土塁瓦層
図版7	1・2.菊花紋軒丸瓦 3～5.三巴紋軒丸瓦 6.永楽通宝紋軒丸瓦
図版8	1・2.三巴紋軒丸瓦 3～5.均正唐草紋軒平瓦
図版9	1・2.五七桐紋鬼瓦 3.行基瓦 4.大保通宝 5.土師質土器

I 調査の経過

1. 調査に至る経過

上田市教育委員会では、国指定史跡 上田城跡の史跡にふさわしい整備事業を実施するため、文化庁、長野県教育委員会の指導を受けながら、昭和63年度より「上田城跡公園整備計画研究委員会」を設置し、その答申をもとに平成3年3月に『史跡上田城跡整備基本計画書』を策定した。

『史跡上田城跡整備基本計画書』では、史跡上田城跡の整備を短期、中期、長期の3段階に分けて計画的に実施していくこととし、計画的な発掘調査の実施、城跡にふさわしくない施設の移転、発掘結果と史実に基づく忠実な遺構の復元整備、城構えをふんだんにした史跡範囲の拡大等を基本的な目標として掲げている。

上田城跡整備の短期目標としては、本丸内と各虎口の整備に重点をおき、早期に城郭としての概容を復元、整備していくことが挙げられている。その実現のために上田市教育委員会では平成2年度より上田城跡の発掘調査に着手し、本丸東虎口櫓門跡、二の丸北虎口石垣跡の発掘調査を実施し、合わせて本丸堀、二の丸電線埋設予定地、同排水路敷設予定地の試掘調査を行った。そして調査結果に従い、平成2年度は二の丸北虎口石垣修復、二の丸電線埋設、同排水路敷設等の整備事業を実施し、平成3年度は本丸堀浚渫事業を実施した。また、本丸東虎口櫓門は発掘結果のほかに明治期の古写真、絵図面、文献史料、類似資料等を参考として復元が計画されている。

平成3年度の上田城跡発掘調査は、本丸西虎口、二の丸北虎口が計画され、平成3年5月29日付で現状変更申請（発掘調査）を文化庁に提出し、平成3年7月22日付委保第40550号により許可を得た。

調査は当初、上田市単独事業として上田市遺跡発掘調査團に事業委託して実施する予定であったが、委託契約締結後に二の丸北虎口の発掘調査分について3,000千円を対象額として國宝重要文化財等保存整備事業補助金が交付されるとの内示があり、二の丸北虎口発掘調査は國庫補助事業として実施されることになった。また、補助金交付に伴う文化庁、長野県教育委員会の指導に従い、補助事業分については上田市の直営事業として実施することとなった。

本調査に係る契約、補助金等の申請事務は次に示すとおりである。

国庫補助金関係	県費補助金関係	発掘調査團
平成3年9月30日 府保伝第7号 (補助金の内示)	平成3年10月9日 3教文第111-2号 (補助金の内示)	平成3年10月5日 (委託契約締結)
平成3年10月14日付 上教社発第260号 (補助金交付申請)	平成3年11月16日付 上教社発第274号 (補助金交付申請)	平成3年10月24日 (変更委託契約締結)
平成3年12月27日付 委保第71号 (補助金交付決定)	平成4年1月23日付 県教委教育長指令 3教文第2-45号 (補助金交付決定)	

2. 調査の体制

調査指導 平井 勝 (東京工業大学名誉教授・昭和女子大学教授)
調査担当者 塩崎 幸夫 (上田市教育委員会社会教育課主事)
団長 塩入 秀敏 (上田女子短期大学助教授・日本考古学协会会员)
副団長 川上 元 (上田市立博物館長・日本考古学协会会员)
調査員 猪熊 啓司 (長野県長野高等学校教諭)
倉沢 正幸 (上田市立信濃国分寺資料館学芸員・日本考古学协会会员)
事務局長 須藤 清彬 (上田市教育委員会社会教育課長)
事務局次長 寺島 隆史 (上田市教育委員会社会教育課文化係長)
事務局員 中沢 徳士 (上田市教育委員会社会教育課学芸員)
尾見 智志 (上田市教育委員会社会教育課主事)
塩崎 幸夫 (上田市教育委員会社会教育課主事)
久保田敦子 (上田市教育委員会社会教育課主事)
調査協力者 青島悦子 井部定雄 岩下真 坂巻ケン子 清水慶二 竹内和好 林正治
堀内今朝次 宮崎研子 柳沢仁美

3. 調査日誌 (抄)

平成3年

- 10月5日 (日) 平成3年度上田城跡発掘調査開始。本丸堀底遺物の調査。
10月9日 (水) 本丸堀南西部より五七桐紋鬼瓦出土。
10月11日 (金) 本丸西虎口調査開始。
10月25日 (金) 二の丸身体障害者用トイレ設置予定地試掘調査。
11月18日 (月) 二の丸北虎口調査開始。表土剥ぎに入る。
11月21日 (木) 本丸西虎口・二の丸北虎口樹木伐採。
12月10日 (火) 二の丸北虎口西側土器調査。石垣との接続状況を確認。

平成4年

- 1月16日 (木) 二の丸北虎口伝染病院遺構の掘り下げに入る。
1月20日 (火) 二の丸北虎口櫓門鏡柱礎石検出。
1月28日 (水) 二の丸北虎口写真測量実施。
2月10日 (月) 二の丸北虎口、本丸西虎口写真測量実施。
2月14日 (金) 平成2年度発掘調査終了。埋め戻し作業。

この後、上田市立信濃国分寺資料館において出土遺物の整理、報告書作成作業を行い、平成4年3月25日調査報告書が刊行され、調査はすべて終了した。

II 本丸西虎口の調査

1. 調査の目的

上田城跡本丸西虎口は、現在「L」字形に虎口南半の石垣が残り、その西端に寛永3年から同5年にかけて建造された隅櫓1棟（通称西櫓）が創建当初のまま現存している。しかし、本来鍵の手状を呈する虎口樹形が、緩いカーブに改変され、道路両端のコンクリート製排水溝や玉石をコンクリートで固めて石垣が史跡景観を損ねている。

絵図面によると本丸西虎口は、北側からの土壁に連結する石垣が南側に伸び、本丸東虎口と同規模の櫓門が南面して建ち、石垣北西隅には現存する隅櫓と同様の2層隅櫓が建っているのが確認される。また、この石垣には石段が設置されているが、幅は本丸東虎口の石段（2間幅）に比べ約半分程度であることが知られる。

今回の発掘調査では、現存する石垣に対応していた北半の石垣の範囲確認と、櫓門の礎石跡の検出を主目的として実施した。

2. 調査の概要

（1）石垣基礎の調査

本丸西虎口北半の石垣は、明治維新後に完全に撤去され、道路面より約1m高いマウンド状を呈しており、桜、銀杏等が植樹されていた。

今回の発掘調査の結果、この盛土は明らかに最近のものであることが確認され、石垣内部の暗黄褐色土による版築層は道路面より20~30cm上部で検出された。

石垣の根石は、東側と南側の2面で確認され、東面は道路端から土蔵にかけて5点の根石がほぼ連続して検出され、南面は道路部分において約7点の根石が連結して検出された。根石の石材はすべて緑色凝灰岩であるが、周辺に集中して検出された栗石と推定される砾群は、5~20cm程度の円礫であり、現存する西虎口石垣も同様の構造となっている。また、西面では根石は遺存していないかったものの、帶状に栗石と推定される円礫群が検出された。なお、北面については今回の調査では充分に追及できなかったが、本丸内民家、真田神社土蔵等が移転した後に、本丸内の石垣と合わせて調査を行う必要があると考えられる。概ねの位置は絵図に記入されている寸法や平面図の検討などから推定可能である。

（2）櫓門跡の調査

櫓門礎石は、現存石垣際で最前列左側の寄掛柱、駒柱の礎石各1基が遺存しているのが検出された。共に緑色凝灰岩で、平面形は前後方向に僅かに長い方形を呈し、規模は石垣際の寄掛柱礎石が長軸57cm、短軸51cm、厚さ60cmを測り、隣接する駒柱礎石は長軸66cm、短軸62cm、厚さ58cm

を測る。両者の間隔は15cmで、上面レベルはほぼ等しく、礎石周囲の下部には乗石状の小砾が若干検出された。

礎石上面に柱を据えた痕跡は確認できなかったが、現存する石垣の面に寄掛柱の痕跡が色の差として遺存しており、前後幅42cm（1尺4寸）の寄掛柱であったことが確認できる。この数値は明治期の古写真より解析した本丸東虎口櫓門の数値とも正確に一致する。さらに石垣天端に冠木を載せるための切り欠きが遺存しており、検出された礎石は原位置を留めているものと推定できる。

礎石が据えられている基盤は、暗黄褐色を呈し極めて堅緻に締まっているが、周囲の土質は軟弱で締まりがなく旧地表面と推定できるような面は検出されなかった。

石垣天端の切り欠きは前後2か所で確認され、櫓門下層最前列の冠木と、最後列の敷桁を納めるための切り欠きと推定できる。冠木の切り欠きは北側の天端石が傾いているが、幅75cm、奥行60cm、深さ49～57cmを測り、奥の部分には扁平な切石で土留めをしている。敷桁の切り欠きは幅110cm、奥行60cm、深さ30～45cmを測り、奥は面を出した円錐2点で土留めをしている。冠木の切り欠き下端から検出された礎石上面までの数値は4393mmを測るが、尺寸に直すと概ね14尺5寸となり、古写真から解析された本丸東虎口櫓門の13尺2寸に対して下層部がやや高くなっていたことが知られる。

礎石を抜いた痕跡は、礎混じりの土坑状となって検出されているが、厚さ約60cmの礎石を掘り出したために穴の範囲が大きく広がっている。また、道路面なっている部分は、道路造成の際にかなり削平されており、明確な遺構は確認できなかった。

3. 出土遺物

本丸西虎口の発掘調査では、テンバコ約10箱の遺物が出土した。遺物の大半は瓦で、鉄製品、陶磁器類も若干含まれていた。これらの資料の多くは虎口南東側の旧通路部分より出土しているが、昭和56、57年に実施された西櫓保存修理工事に際して新たに製作された瓦や、工事用金具類が多数含まれている点から推測して、前回の修理工事の際に埋め立てられたものと思われる。

瓦は永楽通宝紋軒丸瓦、三巴紋軒丸瓦、均正唐草紋軒平瓦のほか、多数の丸瓦、平瓦で占められており、すべて破片として出土した。

永楽通宝紋軒丸瓦は、現存する石垣の上部より瓦当面の下半部が出土している。永楽通宝紋は仙石氏の家紋であり、寛永年間に仙石忠政が上田城を復興した際に使用したものと推定される。

三巴紋軒丸瓦、均正唐草紋軒平瓦は數種類が出土しているが、いずれも現在の上田城隅櫓に使用されていたものである。前述したように、これらの資料には最近の瓦が含まれており、瓦の着替えに際して破損した瓦を埋め立てて整地したものと推定される。

鉄製品としては、角釘類が出土しているが、瓦と同様に前回の保存修理工事に際して、埋められた

ものと推定される。

陶磁器類は数店が出土しているが、明治以前にさかのぼる資料はなく、公園として整備された後の花見等に使用して投棄されたものと推定される。

III 二の丸北虎口の調査

1. 調査の目的

上田城二の丸北虎口は、かつて百間堀などの広大な堀に面していたが、昭和2年に百間堀が陸上競技場となり、昭和42年には東側の堀も児童遊園地するために埋められてしまった。虎口石垣は大部分が明治以降撤去され、北側石垣の一部が残っていたのみである。

上田市教育委員会では『上田城跡整備基本計画書』に従い、短期整備事業として虎口の整備を実施していくこととし、平成2年度に二の丸北虎口石垣根石確認のための発掘調査を行った。

発掘調査の結果、北側石垣の根石はほぼ完全な状態で遺存しており、南側石垣の根石も一部遺存していることが確認された。そして、平成2年度事業として、北側石垣を復元整備した。

平成3年度の発掘調査では、南側石垣跡に所在していた物置が撤去されたのに合わせて、南側石垣の東端の確認と、西側土壘との接続形式の確認、絵図面に記された番所、櫓門等の遺構検出を主目的として実施された。

2. 調査の概要

(1) 石垣基礎の調査

南側石垣の根石調査は、撤去された物置のコンクリート基礎を除去した後に、昨年度に検出されていた石垣根石の続きを追及して行われた。物置はトタン製の簡易なものであったが、基礎は全面にコンクリートが打ってあり、一部に地下室（ムロ）を持つなど根石の損傷が心配された。しかし調査の結果は予想以上に良好で、一部で損傷を受けていたものの概ね根石は良好に遺存していた。また、根石と共に存在したことのない櫓門の礎石も検出された。

石垣根石は北面、南面ともに部分的に抜けていたものの、ほぼ連続して概ね2段の根石が遺存しているのが確認され、裏込めの薙石も検出された。東面の根石については最下層の1列のみが検出され、北東隅部の根石も検出された。根石はすべて緑色凝灰岩の塊石が使用されていたが、北東隅部の1点のみ小叩き仕上の方形切石が使用されていた。根石の規模は、幅1mを越えるものもあるが、多くは50~70cm程度の比較的小型の石が多用されていた。また、東石は5~15cm程度の円錐形が使用されており、幅約1mで検出された。

また、西側土壘との接続形式を確認するために現存土壘を調査した結果、南西隅部には隅石を置かず、そのまま持ち送りで土壘に接続していることが確認された。持ち送りは3段が遺存して

おり、裏込の幅は約60cm、土星芯部の版築も良好に遺存していた。

ただし、北西隅部については、陸上競技場敷地ということで今回は調査できず、今後の課題として残された。

(2) 横門跡の調査

物置の基礎を撤去したところ、石垣北面に接して2点の緑色凝灰岩切石が露出し、さらに鏡柱礎石に相当する1点遺存していることが確認され、これら3点の礎石は横門礎石であることが確認された。

鏡柱礎石は、頂部が切欠かれているが、平面規模はやや左右に長軸107cm、短軸100cmで、推定される厚さは約60cmを測る。基盤は暗黄褐色土で非常に固く叩き締められており、下部の周囲には僅かに栗石が確認された。

脇柱と寄掛柱を合わせた礎石は、前列が長軸140cm、短軸75~80cm（上面幅66~70cm）、厚さ60cmを測り、中列が長軸138cm、短軸72~74cm（上面幅66~71cm）、厚さ60cmを測る。また、中列礎石通路側の上端には幅8~11cm、高さ5cmの切り欠きが設けられており、脇戸の戸当たりかと推定される。石垣根石に沿ってトレンチを入れた結果、両礎石とも叩き締めた基盤の上に据えられており、石垣根石と同時に据えられたものと確認された。前列と中列の柱間は芯々で2,150mm（約7尺1寸）を測り、鏡柱と脇柱の間は1,970mm（6尺5寸）と推定される。

横門後列の礎石については、トレンチの断面に落ち込みが検出され、ほぼ等間隔の位置に据えられていたものと推定された。なお、鏡柱後方の控柱礎石跡については、水道管敷設等による搅乱が著しく範囲を明確にすることは出来なかった。

以上は横門南半の礎石に対する所見であるが、北半については以前に敷設された下水道管と、昨年度の調査により、礎石遺存の可能性はないことが確認されている。

上田城二の丸の諸虎口には絵図面や文献史料により、横門は建造されず、冠木門等の簡単な門と番所をおいて守備していたことが確認されている。しかし、今回の礎石出土は寛永3年から同5年にかけて上田城の復興に着手した仙石忠政が当初より二の丸にも横門建造を計画していたことを示す資料となろう。当時の工事は普請（土木工事）と作事（建築工事）に別れていたことが文献史料等より知られているが、その意味では横門の礎石据えは普請に含まれ、上田城は普請は三の丸まで完了していたものの、作事は本丸が完成した時点で忠政の病没により頓挫したといえよう。

二の丸北虎口に築かれるはずであった幻の横門は、規模としては虎口幅10.5mと本丸横門と大差ないが、礎石は脇柱と寄掛柱が一体となっており、中央部にも寄掛柱が据えられるようになるなど、二の丸虎口の横門にふさわしく、よい強固な構造となっている。

(3) 土橋西側の遺構調査

絵図面には南側石垣の北西部より北方に石垣或は武者立石のような施設が土橋上に構築されていたように描かれており、今回の調査で土橋上にトレンチを入れて痕跡を調査した。しかし石垣が構築されていた痕跡はトレンチ内では確認されず、陸上競技場入口のテラス部分に短い石垣が構築されていたものが、土橋上の陸上競技場敷地内に武者立石が築かれていたものかは確認できなかった。前述の石垣北西部と共に陸上競技場敷地内の調査が今後必要と考えられる。

(4) 虎口東側土壘跡の調査

虎口東側の土壘については、現存石垣の東側にトレンチを入れて調査した結果、地山層を検出し、北側の旧二の丸堀に向けて傾斜していくのが確認された。南側については、下水道等の擾乱により明らかにできなかった。

石垣との接続については、平成2年度の発掘調査により石垣南東部より南に延びる根石が検出され、石垣南東隅部の根石が検出されなかことと合わせて、上層の虎口側は石垣が築かれ土留めと防御を兼ねていたものと推定される。

(5) その他の遺構

①番所遺構

上田城絵図によると、二の丸北虎口の樹形北東隅部には虎口守備のための番所が設けられており、今回の調査ではその遺構の検出を図った。しかし、同所付近は数カ所に電柱片やコンクリート塊等の塵芥物が埋められており、明確に把握できなかった。僅かに北側石垣より4.2m、東側石垣根石より4.4mの位置に円歴数点が集中して検出され、番所基礎の一部かと推定される。

②伝染病院遺構

調査区域南東部より、地下室状の石組遺構が検出された。平面規模は長さ2.6m、幅1.6mを測り、東側へさらに連続している可能性もある。上部には細長い切石が蓋をするように並び、遺構上端の周縁にも同様の切石が廻らされていた。

上部の蓋状の切石のうちでもっとも東側の1本は長さ160cm、幅24cm、厚さ25cmを測り、石組遺構の上部にさわわたしてあるものの、他は長さ80cm、幅、厚さとともに20cmと短く、中央部で陥没している状態で検出された。西半分にはこれらの切石は乗っておらず、土砂が充満していた。西側の部分を掘り下げたが、内部は面を出した円礎で積んであり、深さ1.5mを過ぎても床面に達せず、崩落の危険が生じたため調査を取り止め埋め戻した。

本遺構の南北にはほぼ主軸を削えて円礎の列が並んでおり、あるいは本遺構に伴う何らかの上部施設があったものかと推測される。また、内部からは、完形の磁器皿1点のほか、多数の棧瓦片、焼瓦片が出土している。

本遺構の性格であるが、位置、構築方法、出土遺物等より、大正6年設立の伝染病院に関係す

る遺構であることは間違いないものと推定される。『上田市史』（昭和15年刊）に掲載されている伝染病院の図面によると本遺構の位置は汚水槽の位置に相当する。

3. 出土遺物

二の丸北虎口の発掘調査で出土した遺物には、錢貨と瓦、磁器等がある。
錢貨は天保通宝で、南側石垣の南面根石の調査中に出土した。大きさは $4.94 \times 3.26 \times 0.25$ cmを測り、保存状態は良好である。瓦、磁器は前述したように伝染病院の石組遺構内より出土したもので、瓦はすべて桟瓦である。

IV 本丸堀底遺物の調査

1. 調査の目的

上田城は梯郭式の縄張りを持った城郭で、本丸、二の丸の周間に「コ」の字状の水堀が残らされていた。二の丸の北西部に広がっていた百間堀や捨堀はその形状を利用して昭和初期に陸上競技場と野球場に姿を変え、東側は上田温泉電軌北東線（後の上田交通真田傍陽線）の敷設に伴い著しい改変を受けて、木堀としての形態は失われてしまった。本丸堀については明治以降ほとんど改変されることなく、往時の姿を留めていた。しかし、本丸堀の水源は僅かな湧水と雨水のみであったため、昭和40年代以降、渕水や水質の悪化が問題となり、昭和62年に崖下の尼ヶ淵より井戸水をポンプアップして堀の水量増加を図った。この措置は一時的には水量を増やし一定の効果を上げたが抜本的な解決策ではなかった。特に堀底に堆積した落ち葉や土砂がヘドロ状となつて水中に浮遊し水質の悪化を招いていた。堀の浄化策としては堀底堆積物の浚渫除去が不可欠の問題であった。

上田市教育委員会では、本丸堀の浚渫事業を実施するに際して、文化庁、長野県教育委員会の指導に従い、平成2年度に堀の3か所において試掘調査を実施した。その結果、堀底には1～1.5mの厚さで堆積物が溜り、特に上層にヘドロ状の堆積物が沈殿していることが確認された。堀底の堆積層の中には瓦等の遺物はほとんど含まれていなかつたが、表面には大量の瓦が散乱しており、堀の西側では一面が瓦という状態であった。表採された資料の中には金箔を押した鰐瓦3点のほか、安土桃山時代特有の菊花紋軒丸瓦等が多数含まれ、関ヶ原合戦後に破却された真田氏築城による上田城の瓦と推定された。

今回の堀底遺物の調査は、平成3年度に実施が計画された本丸堀の全面浚渫事業に先立ち、堀底に散乱している瓦等の遺物を回収し、上田城破却に関わる資料を得ることを目的として実施された。

2. 調査の概要

本丸堀底に散乱していた瓦は、明治以降の渴水期にかなり攢乱されており、人為的に集積、破壊されていた。また、量も極めて膨大であったため、堀底を大区画に区切って回収した。

もっとも多く瓦が検出されたのは、堀の南西部で、かつて本丸西虎口の隅櫓が位置していた付近である。ここからは8弁、9弁の菊花紋軒丸瓦のほかに三巴紋軒丸瓦、均正唐草紋軒平瓦、五七桐紋鬼瓦片2点、行基瓦等が出土した。昨年の調査で三巴紋鳥食瓦が表採されたのもこの付近である。瓦は土墨より3mほどの範囲に帶状に広がっており、土墨内にも層をなして検出された。当初、この付近の瓦は明治初期に廃城となった際に堀底に投棄されたものが大部分を占めると考えられていたが、検出された瓦は現在隅櫓に使用されている瓦とは全く紋様が異なることが確認され、ほとんどすべてが関ヶ原合戦後の慶長5年(1600)に破却された真田氏時代の瓦であることが確認された。また、この付近には本丸土墨に半ば埋まったような状態で緑色凝灰岩の塊石群が露出しており、明治の廃城の際に投棄された石垣の一部と推定されてきたが、周囲から出土する瓦によりこの塊石群も真田氏時代の石垣の一部と推定され、後漢工事後も現状のまま保存することとなった。

本丸堀北西部には、かつて隅櫓1棟が建っていたが、この付近からは南西部に次いで多くの瓦の出土があった。検出された瓦は三巴紋軒丸瓦と均正唐草紋軒平瓦を中心であったが、昨年の調査中に高橋今朝男氏により金箔軒瓦が表採されたのはこの区域である。前述した土墨中の瓦層は、堀の西側全域において確認されており、慶長の破却後、仙石氏による寛永の上田城復興により、堀の再掘削がなされた際に掘り残された部分と推定される。なお、堀の北側と東側においては、ほとんど遺物は検出されなかったが、これは寛永の復興の際に掘り上げられ、本丸土墨となっているものと推定できよう。

3. 遺 物

今回の調査によって検出された瓦ほかの遺物の総量はテンバコ約200箱に上り、今年度は充分にその内容を検討することができなかつたが、以下、種類ごとに概要を述べる。

(1) 菊花紋軒丸瓦

以前より上田城跡内において出土しており、数点の存在が知られていた。平成2年度の試掘の際にも8点の菊花紋軒丸瓦が出土し、8弁と9弁の2種類が存在していることが確認された。平成3年度の調査では堀の南西部を中心に約10点が新たに出土した。

この菊花紋軒丸瓦は伏見城跡等からも類似資料が出土しており、桃山期特有の瓦である。

(2) 三巴紋軒丸瓦

三巴紋軒丸瓦は古来よりもっとも一般的な紋様として使用されているが、上田城本丸堀底より

出土している三巴紋軒丸瓦は巴の向きと連珠数により3種類が存在する。いずれも巴の尾が次の巴の頭につながり、全体として環状を呈する特徴が見られる。巴と連珠の間の筋はなく、連珠数は巴右巻きが15個、左巻きが17個と18個の2種類に分けられる。

現在の隅櫓に使用されている三巴紋軒丸瓦は、巴が右巻きで連珠数は13個、3個の巴がそれぞれ独立し、連珠との間に筋が入っている。また、昭和56年から61年までの三櫓保存修理によって取り除かれた江戸後期の補足瓦は、巴、連珠が大きく肉厚で、巴左巻きの連珠16個、同12個等の種類がある。

(3) 均正唐草紋軒平瓦

均正唐草紋軒平瓦は紋様と瓦当幅により2種類が存在する。ともに中心飾より左右に2個づつ簡素な唐草を配する構成であるが、一方は瓦当幅が47mm前後と広く唐草が同方向に巻くに対し、もう一方は瓦当幅40mm前後と狭く唐草は反転している。類例は伏見城跡出土瓦等にあり、桃山期に特有の紋様である。

なお、現在の隅櫓に使用されている平瓦は、瓦当幅40mm前後で唐草は巻かずに波状を呈している。瓦全体の幅は25~26cmと新旧ともに揃っているものの、長さは現用瓦の約25cmに対して、約28cmと真田氏時代の瓦が長く作られている。

(4) 五七桐紋鬼瓦

堀の南西部より2点出土しており、右上部桐花の「五」の部分と、左下部桐葉の部分である。特徴としては、周縁はなく表面全面に桐紋が付されている点と、桐葉が重複せずにそれぞれ独立している点が挙げられる。仙石氏、松平氏は五七桐紋は用いておらず、所謂「太閤桐」の特徴を有する本資料は、豊臣秀吉に臣従していた真田氏時代の所産と推定される。

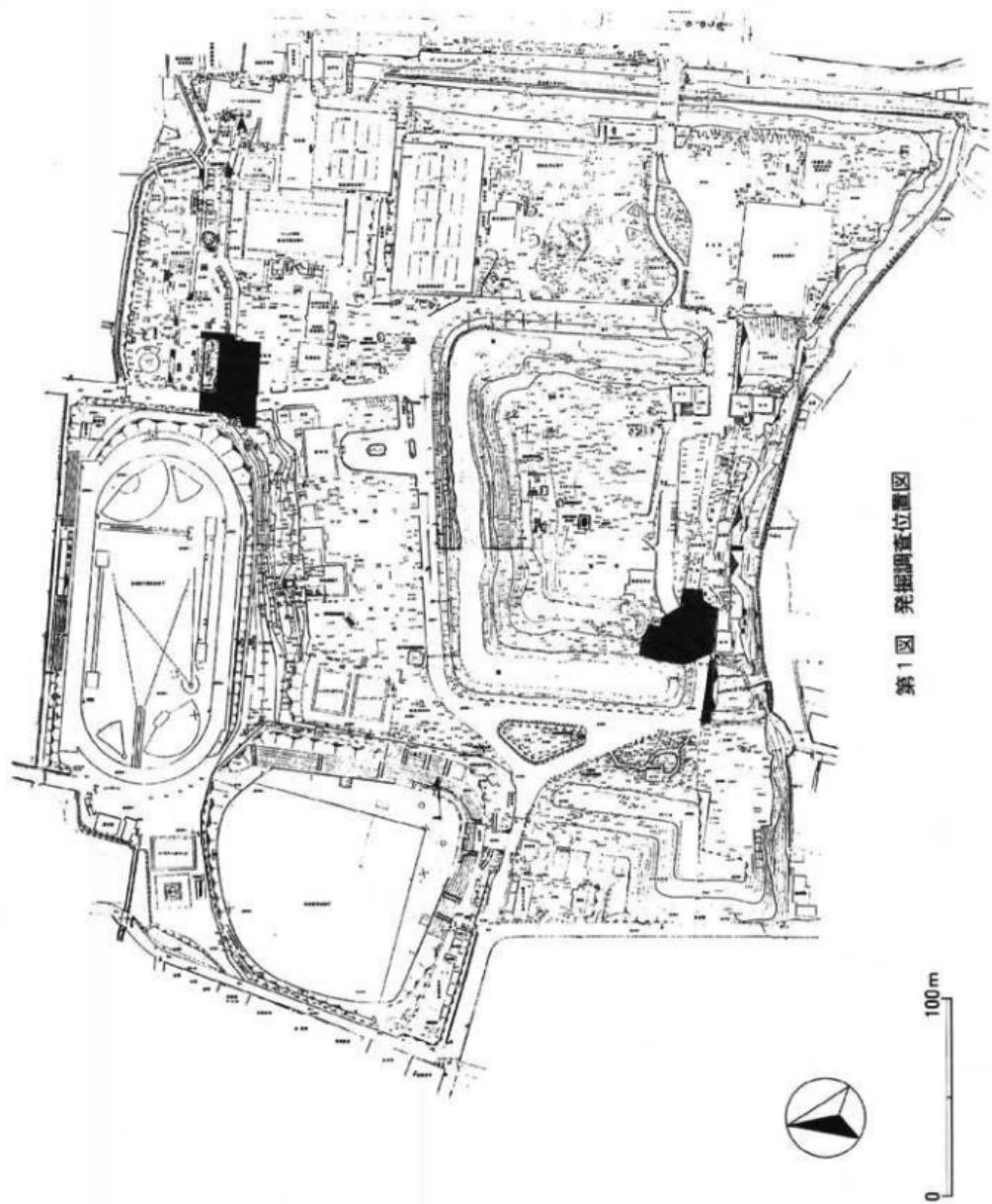
(5) 行基瓦

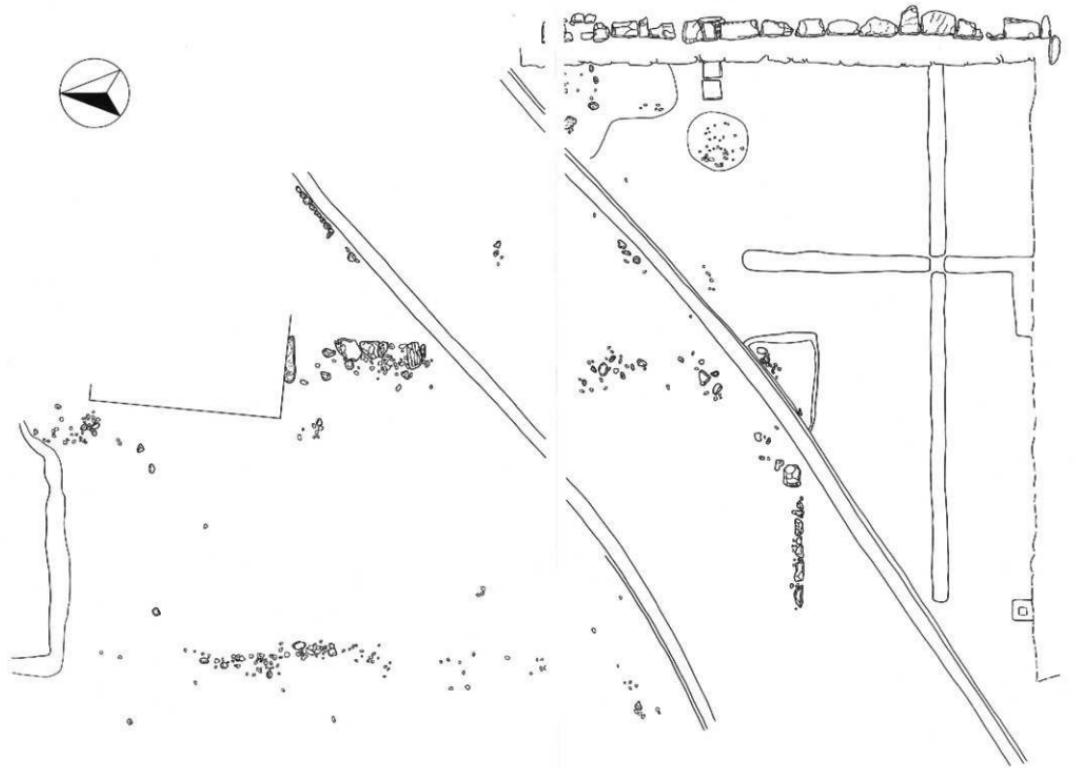
今回の調査で出土した丸瓦では、一般的な玉縁を持つ丸瓦が大部分を占めたが、それに混じって所謂「行基瓦」が若干検出された。行基瓦は行基葺きの技法により葺かれる瓦で、奈良時代の寺院等に稀に見られるが、桃山期の城郭建築には通常用いられず、その性格は今後の検討課題である。

(6) その他の遺物

本丸堀底からは、瓦類のほかに陶磁器、土器、五輪塔等が出土している。陶磁器は椀、皿類が多く、大半は最近の花見等の際に投棄されたものである。土器は土師質土器の所謂カワラケ1点が高橋今朝男氏により表採されている。法量は口径8.8cm、器高2.2cm、底径6.0cmを測る。五輪塔は空輪が出土している。

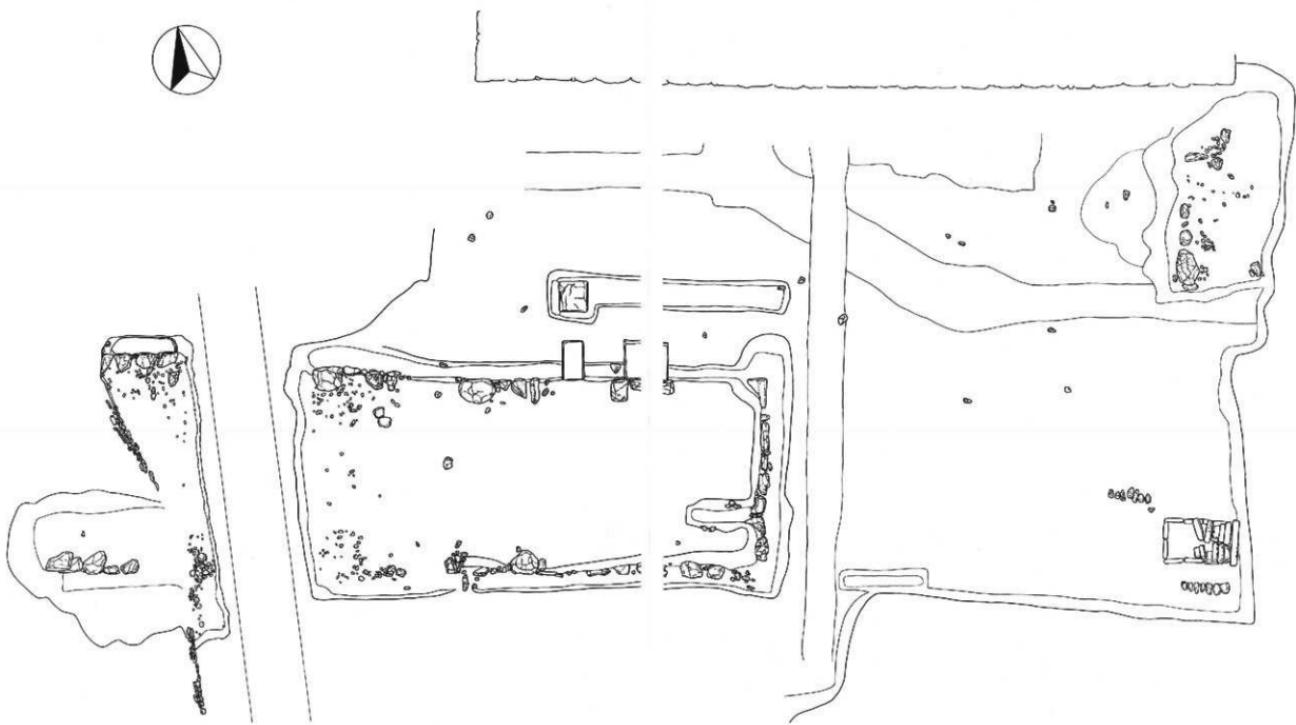
第1図 発掘調査位置図



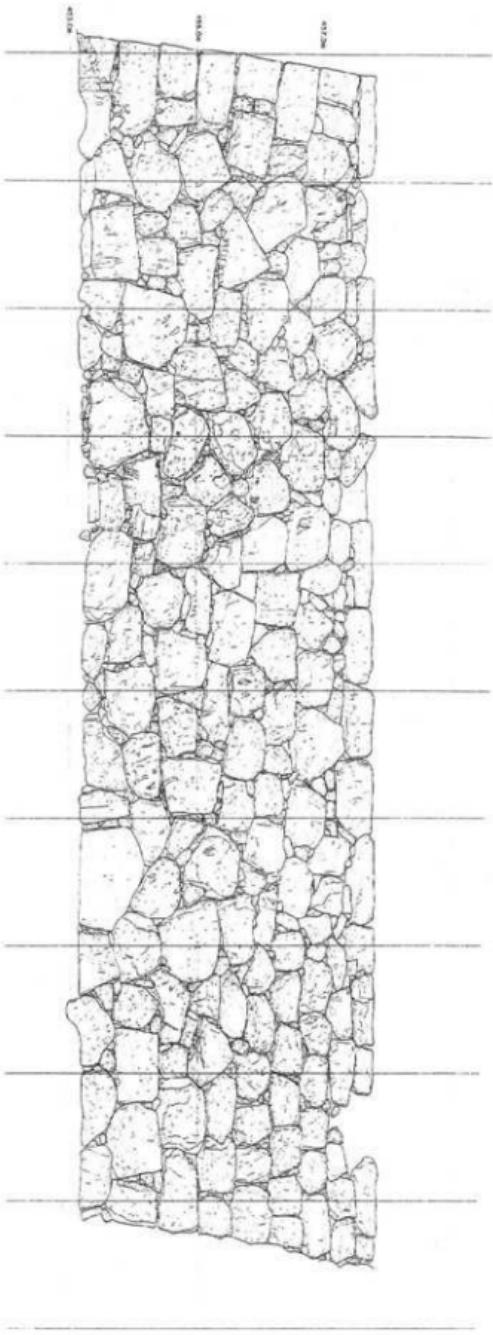


第2図 本丸西虎口平面図

0 6m



第3図 二の丸北虎口平面図



第4図 本丸西虎口石垣立面図（西面）

写 真 図 版



本丸西虎口櫓門跡（南より）



本丸西虎口石垣跡（南東より）



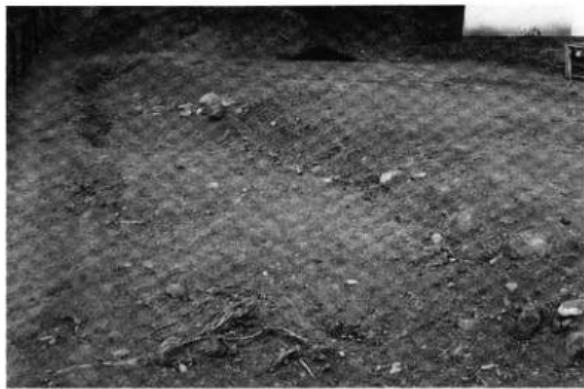
本丸西虎口現存石垣（西より）



本丸西虎口石垣根石東面（南東より）



本丸西虎口石垣根石南面（南西より）



本丸西虎口石垣跡栗石列（南より）



本丸西虎口櫓門跡部分（南より）



本丸西虎口櫓門礎石（南西より）



二の丸北虎口全景（南西より）



二の丸北虎口石垣跡全景（東より）



二の丸北虎口石垣根石東面（北東より）



二の丸北虎口石垣根石・土壠接続部（南東より）



二の丸北虎口櫓門礎石（北西より）



二の丸北虎口石垣根石東側土壘接続部（西より）



伝染病院遺構（南東より）



二の丸北虎口測量風景（南東より）



本丸堀底緑色凝灰岩群（西より）



本丸堀底土壠瓦層（西より）



8 弁重菊花紋軒丸瓦（本丸堀底出土）



9 弁重菊花紋軒丸瓦（本丸堀底出土）



10 三巴紋軒丸瓦（本丸堀底出土）



11 三巴紋軒丸瓦（本丸堀底出土）



12 三巴紋軒丸瓦（本丸堀底出土）



13 永樂通寶紋軒丸瓦（本丸西虎口出土）



三巴紋軒丸瓦（隅櫓現用瓦）



三巴紋軒丸瓦（江戸後期補足瓦。
本丸西虎口出土）



均正唐草紋軒平瓦（本丸堀底出土）



均正唐草紋軒平瓦（本丸堀底出土）



均正唐草紋軒平瓦（隅櫓現用瓦）



五七桐紋鬼瓦（本丸堀底出土）



行基瓦（本丸堀底出土）



土師質土器（本丸堀底出土）

天保通宝（二の丸北虎口出土）

上田市文化財調査報告書第47集

史跡上田城跡

国指定史跡上田城跡平成3年度発掘調査概報

発行 1992年3月25日

上田市教育委員会

印刷 上田印刷株式会社